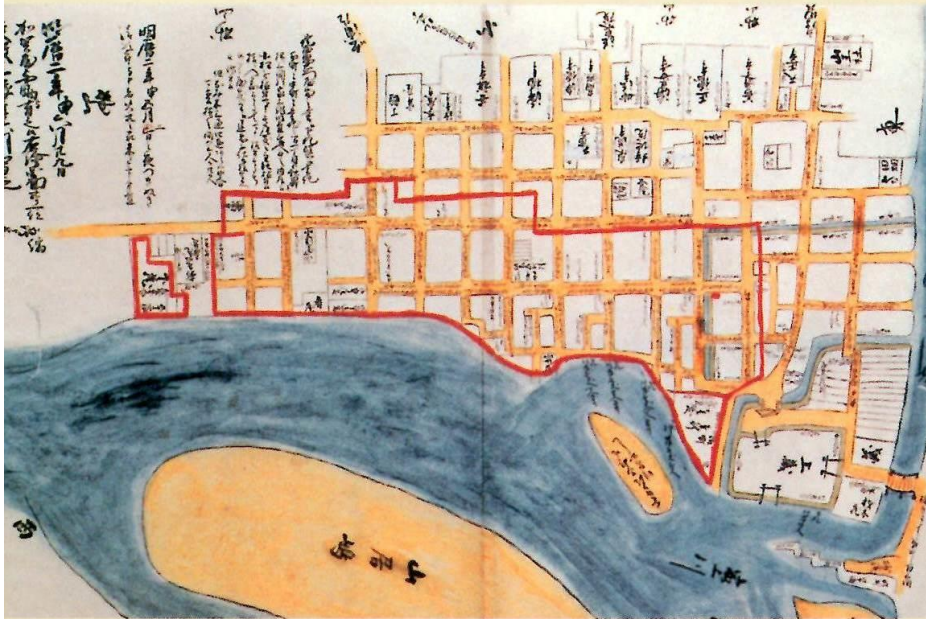


第32回
酒田の
古絵図展

きのわさくあと
1階 / 城輪柵跡展

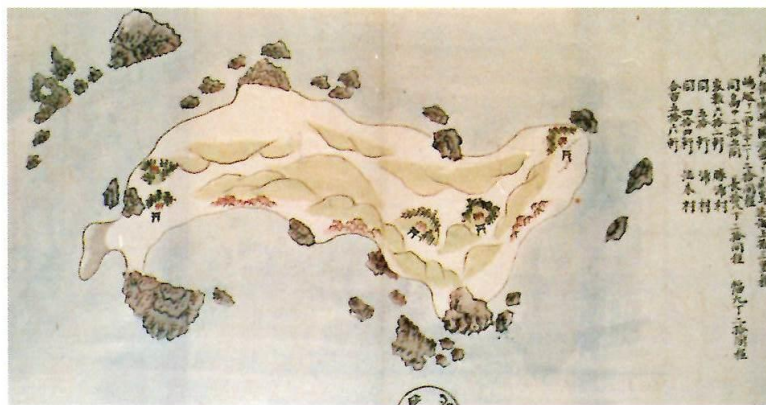


明暦の酒田町絵図

1985年6月5日→7月28日

酒田市立資料館

酒田市一番町 8-16 TEL (0234) 24 6544



庄内領飛島図

大泉叢志

義経記に大泉(おおいずみ)の庄ということばが出ている。これは庄内の古名で、田川飽海をいい、後の庄内藩領と考えてよい。

後の庄内藩が鶴岡藩とよばれ、更に大泉藩大泉県となった時、松山藩が松嶺藩松山県として並立し、この二つが合して酒田県となったことから考えれば、飽海のうち、松山藩領は大泉にはいらないようだが、松山はもと鶴岡の支藩だから、限定する必要はない。

さて、この庄内藩士の坂尾宋呉(150石嘉永4(1851)89歳で没。)は「古の60余国風土記はすたれ、奈曾のしら橋、うやむやの関の跡知る人もない。今の静まる大御代に、池水のいいつたえ、藻塩草かきあつめ」ることを志した。

いつから初めたのか定かでないが、弘采録の大泉叢志序は文化11(1814)年秋である。子万年(文久3(1863)年78歳で没。)その子清風(弘化2(1845)年38歳で没。)の三代が139巻と附録絵図35枚を編集した。

岩波の国書総目録によれば、この写を蔵する数館の冊数がちがうのは巻冊の分合によるものだろうか。

また本館蔵を原書としているが、これは致道館が持っている。

庄内の群書類従といわれる本叢志の活字化が昭和12年に計画され、その趣意書、巻冊、価格まで発表されながら、時局多端、物資の窮屈で実現しなかったのは残念である。

また同年の別の企ても四編で終わってしまった。

〈館報こうきゅう15号、昭和45年2月1日発行より〉

伊東家文書

藩政時代、酒田の行政区画は、酒田町組、内町組・米屋町組に分けられ、そのうち酒田町組は現在の下組にあたり、港町の自由都市的な性格をおび、海船問屋をいとなむ36人衆によっておさめられた。

内町組・米屋町組が上組で、いまの上通りにあたり、亀ヶ崎城の城下町として発達してきた。

上組にはそれぞれ二人の大庄屋によって支配され、最初内町組は三丁目弥右衛門・斎藤半内であったが、内町の肝煎であった伊東弥左衛門が互選によって、三丁目家になって大庄屋に任せられ、明治にいたるまで代々勤めている。

「伊東家文書」は、この伊東家に残された「大庄屋文書」である。三つの役タンスにいっぱいあったといわれ、今では市立中央図書館に寄贈されている。

この文書の中で、もっとも古いと思われる寛文8年の「御用留」・「河村瑞賢による西廻り開拓直前の御城米輸送史料」・「鷹町・外野町の最初の町割図」・元禄9年の「酒田町大絵図」の未完成品・「明暦2年の酒田町大絵図」、その他多くの絵図面や古文書類が保存されており、近世の酒田の町政・経済・海運・水運などを知るうえに、またとない好史料である。

現在酒田に残されている文書の中で、「野附文書」（市立光丘文庫）・「36人御用帳」（本間家蔵）とともに、「伊東家文書」は当時のことを知る尤も貴重な好史料である。

〈田村寛三〉

酒田の古絵図展・展示資料目録

- 入館料／一般 100円・児童生徒50円
- 開催時間／AM9 :30~PM4 :30 ●休館日／月曜日・祝日